

令和元年度 紀の川流域懇談会 議事骨子

日 時：令和元年 11 月 26 日（火）

場 所：和歌山河川国道事務所 5 階 501・502 会議室

★ 議事次第

1. 開会
2. あいさつ（近畿地方整備局 河川部 河川保全管理官）
3. 議事
 - 3－1. 河川整備計画の進捗点検について
 - 3－2. 工事進捗について
 - 3－3. 令和元年度の紀の川における事業の実施状況について
4. その他
5. あいさつ（和歌山河川国道事務所 所長）
6. 閉会

★ 議事内容

1. 河川整備計画の進捗点検について（資料－1）

河川管理者が実施した点検結果の報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

・（P33：環境⑤）

水質について、BOD で代用して 1 ヶ所だけのデータが載っているが、複数の地点でのデータ提示をしてほしい。水系全体としての水質がどうなっているのか、上流域と下流域でも違ってくると思う。

→ 船戸だけではなく上流でもデータをとっています。上流でも水質的には全く問題ないところですが、本編に載せられていないので、報告書の中に盛り込むように修正させていただきたいと思います。

・（P10：治水①）

紀の川大堰の実際の運用状況についての報告を入れていただきたい。具体的に言うと洪水時の運用の仕方、恐らく堰を下げる形で運用されていると思うが、それによってどれぐらい水位の低下を、上下流においてどれぐらい効果をもたらしていたのかという点を含めて整理していただきたいかった。

→ すみませんが次回以降、新たな項目として盛り込むようにさせていただきたい

と思います。ダムが当然入ってございますので、大堰の効果というところについてもあわせて載せたいと思います。

・(P28：環境③)

魚道の遡上のデータについては、アユに特化せずに他の魚種、例えばウナギ等、あるいは甲殻類のモクズガニであるとか、そういう他の生物種の遡上状況というのをぜひ入れてほしい。やっていたら結構だけれども、もしデータをとっていないのであれば、今後ぜひ検討してほしい。

→ ご意見をいただいたので内部で検討して対応をさせていただきたい。

・(P9：環境①に関連)

先ほど環境の話がいっぱい出たが、こういうところで結果を全部見せるのは難しい。長期的にモニタリングをしており、大滝ダムが運用開始して大分たってきたので、その影響を含め、また他にも色々な影響があって環境が変化をしてきているので、結果をきちんとまとめた方がいい。データがあるのにもったいないとすごく感じる。

(まとめ方についての事務局からの質問を受けて) 1つは、データが上流と下流でばらばらにあるので一つに結合すべき。もう一つは、解釈・解析が必要。やはり何でどう変化したかをまとめる作業もやったほうがいい。長期的にどういうふうに変化したかというトレンドをまず見るのが大事。その次に、それぞれのいろんなイベントとかいろんなことが起こっているの、それと対応させてやっていく。そのときに大事なことは水質だけじゃなくて、いろんな観点を含めてまとめていくことが必要。

→ ありがとうございます。我々は、環境と治水の両立を考えながら今まで事業をしてきており、その中で解釈・評価という話になってくると、環境だけ取り上げてという評価をすればいいのかというのは、悩ましいところもあるかと思うので、個別にご相談をする中でいろいろ考えさせていただければと思っています。

マクロな関係づけで、そのトレンドを見る、ということだと思う。

・(P9：環境①に関連) ※前の意見を受けて

今の話に関連して、紀の川大堰ができてから土砂の流下の影響が干潟の粒度、砂質、泥の粒度にかなり影響していると思われるような状況がずっと続いている。それに伴ってカニの生息数、例えば今年は絶滅危惧種のシオマネキの個体数が激減している。流下させる土砂と、そこに住む生物、生息環境の変化と生物の種類数とか数の変化等を解析し、適正に、計画性を持って流下させればよいのでは。

もう一つ、先ほど話の出たアユの遡上数の関係について。多分産卵個体群がふえて、産卵数が多くなって、そのおかげで翌年の遡上数が多くなっているというふうに考えられるが、紀の川の自然環境の変化とか、改善された状況を知るには、先ほど他の先生が言われたように、アユ以外の魚も含めてどれぐらいの魚の種類、あるいは数が遡

上できているか毎年調べてほしい。アユとハゼ類、ウナギ、浮き魚の4種類ぐらいに分けたら素人でもカウントしやすく、それでほしいの状況はわかる。

→ 先生のほうからまとめ方というところでアドバイスをいただきましたので、そこを踏まえて、できる、できないも含めて検討をさせてください。

大滝ダムをつくと、確かにものすごいインパクトがある。何か川というのは大きなインパクトを与えると、それによって川の特性が変わってくる。それが全部環境とか生物とかに影響してくる。場所ごとにも違ってくる。そういったことを研究するというよりも調べておくということは非常に大事じゃないかなと思う。紀の川の将来がどういうふうな特性に変化するか、それが逆に将来の計画を立てる上で非常に必要になる。紀の川自体に注目しておられる方は昔から非常に多く、そういう先生方の目標とされているテーマはじかに、実際のそれを管理する側にも大きいコントリビューションがあると思っている。そういう気持ちでやっていただければ非常にありがたい。

・(P18: 治水⑩)

平成30年度からライブカメラ映像の提供があるとのことで見ると、非常にわかりやすく公開してもらっているように思う。その中で、個人の意見になるかもしれないが、せっかくな映像を提供しているが、一般の方に結びついているのかと思う。台風時の前に、地域の市町村なんかと連携して、こういった情報が収集できます等の情報や、(資料-3にあったような) 児童の皆さん方に案内する資料を子供だけでなく大人にも知ってもらえたら、災害時の人的被害を防ぐ一助になるのではないかな。

→ 紀の川のリスクがどこまで周知できているかということについて、個人的考えになりますが、(平成29年の21号台風による内水被害発生状況を踏まえ) 本川の弱点というよりは支川部に弱点が来るような災害、被害についてはかなり実は住民の皆さんは意識されていると思っています。一方で、国が本川の河川管理としてやっている、いわゆるボトルネックとなっている狭窄部については、恐らくリスクとして認識している人は少ないと思う。認識されないと、直轄は何のために整備をやっているのか理解されないで、国の仕事として、認知度をあげるよう危機感を持って頑張りたいと思っています。

もう一つ、水位計やカメラの話に関しては、避難勧告が出るようになり、水位計を設置し、それでも逃げないのでカメラをつけ、というような形で全国的な施策がどんどん充実してきており、マスコミも巻き込んで避難を叫んでおり、順次階段を上ってきたことかと思っています。それでも今回の災害で逃げていない人もいます。なぜなのかというところで私見にはなりますが、洪水で死ぬシーンというのがなかなか思い浮かばないからではないかと。ただ、あまり死ぬ、という形で子供たちに教えるのはよろしくないで、(資料-3のように) マイルドにして伝えていくことで、逃げる人が増えたらいいなということで防災教育をしています。なかなか教育を主体にするほど今組織に余裕がないので、事務所として今後の展開を悩みな

からアイデアを考えているところです。

・(P18：治水⑩) ※前の意見を受けて

地域の中でいろんな調査をするが、地域の方に聞くと 80 歳以上ぐらいの一人暮らしの方も多く、その方たちにもまずは逃げることが認識されてきていると感じる。指定避難所先に逃げよう、とまではきいているが、欠けているのは、「どこがどうなったときにまず逃げなきゃいけないか」という集落レベルまで落とし込んだ予知や仕組みで、それを協議会でやっていくのが大切なように思う。

・(P18：治水⑩) ※前の意見を受けて

19 ページのライブカメラの公開地点を見ると、他の河川に比べてもかなり充実している。あとは、どういう出車で、どんな風に活用されたかという調査をぜひ協議会のメンバーぐらいで実施してもらい、様子を知る。ここの水位がどれぐらいになったら逃げないといけないよという情報はすごく重要な一方、ここの水位になったけれどもそこで（被害なく）終わったという経験を何度もすると、様子を見始めるところがあるので、それを前提に考えた方がいいところもあるかと思う。すぐに何かできるわけではないかもしれないが、現状を知るのは重要な基礎情報になると思う。

・(P10：治水①)

昨年 8 月の台風 20 号の大滝ダム の操作のグラフについて、23 日の 12 時前後に少し貯留しているが、どのような事情があったのか。

→ ダムを操作するときに流入量がふえると、いきなりそこまで放流できなくて、放流の原則みたいな形で 10 分間に放流の開度を上げることができるとか決まっていますので、それによって 12 時ごろは（放流量が流入量に）追いつかない現象が起きてしまうといった状況になるかと思えます。

・(P36：環境⑥)

大門川における水質の月別平均値のグラフで、伊勢橋の BOD が高くても 13mg/l ぐらいであるのに、試験導水前のグラフでは倍ぐらいある。これほどここの汚れは日によって違うのか。

→ 確認はしておきますが、この試験自体は 2 週間ぐらいの間での話なので、相当悪い日もあります。大門川のこの地点で、いわゆる農業の落水がなければ、排水しかこの川の中に出てきていないような状況なので、試験時期はたまたまひどかったことも十分あります。

・(P41：管理②)

除草のためにヤギに食べさせている実験をしたというのがあり、一定の効果が見られたとの報告があるが、だからどうなのだと。今後も続けるのか、ちょっと一回やっ

てみましたというだけなのか、その辺も明確に報告されたほうがいい。

→ 実を言うと、今年度でいったん終了ということを用意しております。我々はヤギを飼うというのができなくて、レンタルで借りてきますが、今他の地域でも流行っており、なかなかヤギを手に入れるのが難しいような状況です。作業効率的な問題もあり継続するのはもう少し考えないといけないよねというところで、試験的に今やっています。

・(P44：管理⑬)

流木はいつも滞留する場所が大体決まっているのか、滞留する場所を作った方がいいのか、河川の管理と流木との関係なんかを教えてください。

→ 流木止めというか、網場というダムの本体のすぐ上流のほうにネットを置いています。下流には一切流さずに、そこで流木を全部とめるようにしています。そこでとまったのを集めて処理しています。

・(P44：管理⑬) ※前の意見を受けて

流木がダム湖の中で維持されるという話だけれども、実際に以前大きな台風があって洪水を起こしたときには、紀の川の汽水域の、シオマネキがたくさんいる干潟のところには大量の流木が山積みになって堆積していた。それはどこから来たのか。

そのときに直接事務所に、流木を撤去してくれと言ったが、ちょっとすぐはできませんと言われた。3～4年ぐらい前のことになるが、配慮していただきたい。

→ 干潟で堆積した流木の発生源は大滝ダム以外の支川です。支川から流れてくる流木なり、河川敷に生えている木が倒れてそのまま流れたりして、紀の川大堰はたしか流木とかをとめるような機能はなくてそのまま流し切ることになりますので、下流のほうに全部流れていくことになります。

堆積した流木の撤去については、恐らく、普段そういうことをやる想定ではないので、維持管理のお金がそのときに残っているかどうかもあるのかなと思います。事務所の予算の中で当然やれることはやっていくことになるのかなと思います。

・(P15：治水⑤)

魚は大水が起きると端へ皆寄って流されまいとするが、護岸化が進んで端っこがコンクリート護岸になってきており、全部流下していつている状況がすごく生まれていく。また、樹木の伐採との関係で、高水敷の樹木は、そういう魚の流下するときの避難場所になっている。そのところは考えて伐採されているのか。考えていなかったらぜひ考えてほしい。

もう1つは、本川と支流との合流点というのは魚の避難場所であったり、ふだんの生息場所であったり非常に重要な場所である。そういう場所は近自然工法で魚が住めるように残しておかないといけないが、でき上がりの工事を見たらそういうところに配慮されていないので非常に残念である。

→ 最近、国のほうでコンクリート化するとか護岸を新たにつくるのは多分やっていないと思います。これから護岸工事をしていくときにはきちんと考慮していきたいと思います。悩ましいのは樹木伐採で、支川との合流部は、地元からすると支川からどンドン水を流してもらわないと支川からあふれてしまうので、そこを樹木伐採してくださいという要望が各自治体からまさに寄せられているような場所で、バッティングするところが非常に悩ましいなというところでもあります。

・(総括的なご意見)

いろいろ貴重なご意見をいただきました。予算が潤沢とは言えない中だが、環境とか生態環境とかの関係について、そこまである程度ケアして設計や施工をすることが河川の本当の管理のために必要ではないかということで議論をしてきた。物事をやるときに先生方から具体的にここに注意せよとかいうようなアドバイスをいただいて、それを十分咀嚼しながら積極的に取り入れる姿勢を忘れずに臨んでいただきたい。

2. 工事進捗について (資料-2)

河川管理者が工事進捗について報告をしました。特に意見は出されませんでした。

3. 令和元年度の紀の川における事業の実施状況について (資料-3)

河川管理者が令和元年度の事業の実施状況について報告をしました。特に意見は出されませんでした。

4. その他

河川管理者が、次回の懇談会の開催時期(3年後を予定)について連絡しました。

以上